

Title	古賀秀男著 チャーティスト運動の研究
Sub Title	Hideo Koga, Study of Chartist movement, Kyoto, 1975
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1975
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.68, No.11/12 (1975. 12) ,p.857(77)- 859(79)
JaLC DOI	10.14991/001.19751201-0077
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19751201-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書 評

古賀 秀男著

『チャーティスト運動の研究』

古賀さん、年来の努力の結晶ともいふべき「チャーティスト運動の研究」を御恵贈下され、ありがとう。わたくしが、本書の出版を知ったのは、イギリスにおくられてきた日本の新聞の広告欄でしたが、いまこうして読むことができ、紹介させて戴くのは、一足先にごの問題を手がけた者として、何ともいぬ感慨におそわれるものです。

いまから20年近く前に出た拙著「イギリス労働運動の生成」は、あなたの今回の力作の出現によって、まったくその役割を終えたということが出来ます。そしてわたくしはそれで満足です。もともと「若さ」だけで書きなぐったような粗雑な研究ですし、当時は、あなたが日本で利用されているような史料にも乏しく、ほとんど第二次史料に依拠しているため、実証的にはもとより、論理構成も弱く、杉山忠平教授から、きびしい批判を賜ったのもいまはなつかしい思い出です。

1年6ヵ月の留学を終えたいま、ウォーリック大学社会史研究所での1年3ヵ月、そしてロンドンでの3ヵ月、その問題整理に忙しく、あなたの研究が、帰国してはじめて読み了えた唯一の書物です。いま、わたくしはこの力作につけ加えるべき何もものもありませんが、ただ「チャーティスト運動」ときいただけで、かつての恋人にばったり出会ったような胸のときめきを覚えます。いまわたくしの研究題目は、チャーティストから離れ、19世紀末から今世紀の20年代にかけての社会政策や社会経済思想、そして最近では日本経済学史の研究ですが、それでも、チャーティスト運動は、つねにわたくしの深層心理に生きていたような気がします。そこで、年来の友人としての関係から、読後感などとともに、いくつかの問題で教えて戴けたらと思ひ、筆をとった次第です。

本書は目次をみると、第1部チャーティスト運動の成立、第2部チャーティスト運動とアイルランド問題、そして第3部チャーティスト運動と社会主義、という3つの大項目から成り、この点ではこの運動を年代史的に叙述しようとする意図がうかがわれるとともに、さらに中項目をみると、たとえば第2部第3章には、

「チャーティスト運動とアイルランド問題」、第4章「チャーティストの土地計画」、第5章「後期チャーティズムと社会主義」というように、問題史的に展開され、この両者の混合の形をとっていることが印象的です。これは、ひとつには、本書がいくつかの論文を基礎としているからですが、同時に、あなたがこの運動についてもっとも重要な関心を抱いている問題が、アイルランド問題、土地計画および社会主義が、チャーティストとどのようなかわり合いを示すか、まさに本書のモチーフはここにあることをあらわしているといってもよいのではないのでしょうか。そこで、当然、わたくしの質問も、この3つの問題にかかわらざるをえないわけです。

古賀さん、わたくしは、あなたの研究から実に多くのことを学びました。たとえば、アイルランド問題については、アイルランド独立とチャーティスト運動をめぐる Daniel O'Connell と Feargus O'Connor との対立の様相と、この両者の間にあってそのいずれにも批判的な Bronterre O'Brien の思想、そして O'Connor とははげしい対立抗争の関係にあった William Lovett への O'Brien の微妙ともいえる接近、このなかで、第3章第3節ファーガス＝オコナーとアイルランド問題において、「オコナーの基本的立場は、イングランドとアイルランドの民衆は、共通の支配階級によって全く同様に差別され経済的に搾取された破滅状態におかれており、この両者を分離・分断することは、民衆を抑圧し支配している階級を援け増長させることにほかならず、民衆が権利を獲得し解放をかちとるためには、両者が共通の敵に対し、団結・連帯することこそ必要な前提である、というものであった」(pp. 158~159)とされ、さらに、第1インターナショナルにおけるマルクスのアイルランド問題にたいする態度にふれ、「オコナーはまさしく国際的視点に立つプロレタリアのアイルランド解放論の先覚者であったといえる」とのべていますが (pp. 176~177)、この点は問題です。O'Connor の立場が、主としてイングランドの運動に基礎をおくチャーティズムの達成がアイルランド解放の前提条件をなしているという認識は、マルクスの見方とはやや異なるのではないのでしょうか。すなわち、マルクスはあくまでも、アイルランド内部における革命的状況が激化し、民族運動の昂揚の結果として、強制併合がなくなったとたんに、……社会革命がアイルランドで爆発し、「イギリスの地主制度自体を崩壊させる」(pp. 176~177)としているのにたいし、O'Connor は、

アイルランドの民族運動の評価の点では、はるかにマルクスよりも悲観的であったのではないのでしょうか。もちろん、1840年代の O'Connor と 1870年代の Marx とでは、アイルランド問題の認識の段階が異なることはいうまでもありませんが、O'Connorが、マルクスのように、アイルランド農民の革命的蜂起に期待をかけていたとは考えられません。彼の土地計画は、こうしたアイルランドにおける革命の可能性にたいする見とおしの暗さと一派の関係があるのです。その意味では、O'Connor と Marx とのアイルランド革命についての見方には、ある種の共通したものと同時に、相矛盾する面ももつのです。マルクスのイデオロギーは明確です。しかし O'Connor とは一体何者なのでしょう。そのイデオロギーは社会主義ではなく、ざりとてブルジョア・ラディカルでもなく、またたんなる民族主義者でもありません。やはりチャーティストというほかに形容すべき言葉を見出しえないのです。その点から「オコナーはまさしく国際的視点に立つプロレタリア的アイルランド解放論の先覚者」という規定のなかに、彼がマルクスにみられるように、アイルランドについて、「民族としての解放」と「プロレタリアートとしての解放」とを結びつけていたのだと理解するとすれば、それは読みすぎであり、当たらないと思います。そしてこの点は、彼の「土地計画」の構想と関連する問題です。

古賀さん、わたくしは、あなたの克明な研究のなかで、もっとも興味深く読んだのはどの部分であると思いますか。いうまでもなく、第3章チャーティスト運動とアイルランド問題と第4章チャーティストの土地計画です。とりわけ、土地計画について、これだけ詳細な研究は、日本ではもちろん、イギリス本国でも少ないと思います。史料的な面ではまことに周到で、わたくしの批判の及ぶところではありませんが、この運動の評価の点では、やや意見を異にします。わたくしも含めて、従来の研究者は、O'Connorの土地計画の運動を積極的に評価しようとせず、その消極面のみを強調したことを指摘していますが(181頁)、あなたはまたこれとは対照的に、その明るい面だけを強調する叙述が印象的です。たとえば、あなたは、O'Connorの土地計画を、エンゲルスが高く評価したことをあげていますが、しかしこの評価は後に、この計画の破綻とともに、マルクスとエンゲルスによって修正されることは、ふれておられるとおりです。この土地計画は、たしかに古い歴史をもち、深刻な不況期には、海外への移民政

策とならんで、内国植民運動として提起され、19世紀末に至るまで大恐慌の時期には、有効な失業対策として真剣にとりあげられたことは、たとえば José Harris の詳細な社会政策研究、Unemployment and Politics, London, 1972 によって明らかにされています。

古賀さん、もし O'Connor の土地計画が、たんに失業対策として企図されたのだとすれば、それなりに理論的根拠があり、これを「復古的」あるいは「時代錯誤的」として批判することは間違っているかもしれません。しかし問題は、O'Connorが、これによって、チャーティストの獲得、すなわち男子普通選挙権の実現とこれによってアイルランド人民の民族的解放を獲ちえようとしているところに問題があります。もし O'Connor が、支配体制の転覆を願うのであれば、当然、アイルランドにおける地主・小作人関係の廃絶、同時にイングランドにおける大土地所有制度の廃止を目標にせざるをえないはずで、より具体的には、アイルランドにおける「闘争組織」としての農民団体の結成によって、トーリーの支配に大打撃をあたえる方向です。「青年アイルランド派」はまさしくそうした方針をとったものと思われまゝ。だが、O'Connorの土地計画には、そうした解放の視点がきわめて稀薄なのです。あなたもいわれるように、労働市場での圧力緩和のための政策としてはもちろん意味ですが、精々2~3エーカーの小農民層の創出が、果してどれだけ大地主制に脅威をあたえることができるか、おそらくマルクスの彼にたいする批判もこの点にあると考えられます。O'Connorの本意は、1842年以後、深まる恐慌のなかで、失業者チャーティストの戦列からの離脱を防止するための、きわめて生活防衛的な役割をこの運動に託したものと思われまゝ。

しかしそのような本音とはちがって、この運動に、それ以上の、民族的あるいはプロレタリア的解放を期待しようとしたところに非常な無理があり、さまざまな批判や同志からの非難、あるいは分裂をよびおこしたのです。その点で、あなたの O'Connor 評価は、彼の人間性に魅せられる余り、その理論的混乱を正しく見抜くという点で甘いような気がしてなりません。

最後に、1848年以後の後期チャーティストの問題についてのべまじょうか。

古賀さん、あなたは、「チャーティスト運動とは何か」と問われたら、どのように答えますか。むづかしいですが、わたくしは、「1830年代の半ばから50年代初頭にかけて、イギリスにおこった男子普通選挙権獲得

をめぐす革命的な大衆運動」というように規定したいと思えます。その場合、イギリスという、当時、もっとも先進的で政治的意識が目覚めた労働者が、階級的に成熟していたという土壌が重要で、チャーティズムは、わたくしの意見では、イギリスに固有な運動と考えられます。これがとくにその後期の段階で国際的な民主主義運動と密接な関係をもつことは事実ですが、チャーティスト運動が国際的な運動の一環としてくみいれられる50年代半ば以後の時期は、48年以後とは質的に異なった段階ではないでしょうか。その意味で1847~1848年恐慌とこれにつづくフランス2月革命は、ヨーロッパ史に一時期を画するものであり、チャーティズムの歴史にとって、これは決定的に重要な意義をもつものであると考えられるのです。

古賀さん、あなたは、わたくしが、1848年以後のチャーティストの動きを無視もしくは軽視しているという批判をされています(p.262.註)が、わたくしはJonesやHarneyの努力を軽視するものではなく、ただ1847~1848年の恐慌とフランス2月革命を、労働運動史における時期区分の上で決定的に重要であると考えるにすぎません。わたくしの旧著が、多くの先学たちの古典的研究に依拠していることは事実ですが、ただこれらの人々の説を祖述するにとどまらず、1848年のイギリスを中心とするヨーロッパ資本主義発達史における重要性を示唆するものであったことです。

古賀さん、あなたとわたくしの間的重要な相違点はどこにあるのでしょうか。1848年前後を契機として、イギリス産業構造の変化、繊維産業における手織業から機械生産への急速な推移と、これにともなう手織工のいちじるしい減少という事実からして、チャーティスト運動の担い手としての労働者の階層にも、大きな変化がみられ、とくに40年代から50年代にかけて労働組合運動がその勢力を伸張していくわけですが。チャーティスト運動の歴史を考える場合、たんに指導者間のイデオロギーの問題や組織上の対立のほか、産業構造の変化とこれにともなっておこる階層分化、さらには労働者意識そのものの変化にも注目すべきではないでしょうか。その意味で、機械的に行うことは慎まなければなりません。労働運動史、ひろく言って社会史研究において時期区分は重要な意義を担うのです。1848年以後の、いわゆる後期チャーティズムにおいて、E. JonesやJ. Harneyの努力、その友愛民主協会を中心とする活動には、チャーティスト運動の復活とさらにChartism and something moreを展望しながら、国際

的な運動への拡がりをもつものですが、果して、イギリスの労働者の大衆は、どれほどこれについていったか、よくわかりません。あなたの克明な研究でも、この点はふれられていません。それゆえ、わたくしは、1850年以後の運動は、JonesやHarneyの努力にもかかわらず、いわばチャーティズムのエピローグであると考えられるのです。総じてあなたの研究には、こうした大衆と運動の指導者との関係が明確にのべられておらず、指導者の群像の評価に焦点があてられているという特徴がみられます。十数年に及ぶ長い運動の道程では、この運動の担い手にもいちじるしい変化があったはずで、とくに1840年代から50年代にかけては、何か重要な変化がみられたのではないのでしょうか。今後のあなたの研究によって、この点が、明らかにされるならば、私にとっても教えられるところ多く、期待してやみません。

ともあれ、あなたの研究によって、イギリス社会史、とくにわが国におけるチャーティズム研究が、国際的にも比肩しうる水準に達したことを、わたくしは確信します。イギリスから帰国して、1ヵ月がすぎましたが、あなたの業績に接し、大きな喜びとともに、わたくし自身への励ましとしてうけとり、今後、研鑽をつづけたいと思えます。

(ミネルヴァ書房、1975年3月、A5判402頁+vi, 4,200円)

飯田 鼎 (経済学部教授)